

講演会「大逆事件針文字書簡の発見」

令和3年9月26日 於 生涯学習センターアビスタ ホール

講師 小林康達氏^{やすみち}（元我孫子市史編集委員）

今回の講演は、大逆事件と社会主義といったような大枠ではなく、針文字書簡という一つの資料をとおして、大逆事件を見る、という趣旨でお話します。まず針文字書簡を発見したときの話からしてみたい。杉村楚人冠^{すぎむら そじんかん}が残したような緻密な日記ではないが、日記代わりに使うこともある私の手帳を見返してみると、2004年9月6日に「市史室で書簡を読む、大逆事件の時の楚人冠に助けを求める秘密的書簡に出会う、真偽について専門家の意見を聞きたい」と書いている。私は2000年に楚人冠邸の資料整理に関わり、その頃は市史近現代史部会で『我孫子市史』を書くことと並行して進めていた。資料整理と市史刊行が一段落ついたので2003年度で、その後私を含めて三人が残り、資料目録の作成に当たった。

その日は書簡を順に読んでいって、一点一点資料を収めている資料封筒に書かれた記録（注：差出人・受取人・日付・資料形態・内容など）に間違いがないか再確認していく作業をしていた。そのとき備考欄に「封筒と白紙」と書かれた資料封筒が目についた。開けてみると、封筒には非常に達筆な字で宛名が書かれているが差出人は無署名、消印は牛込郵便局の「43.6.11」。中の紙には何も書かれていない。ただ、あまりに達筆な封筒に白紙一枚というのが気になった。たまたま（紙を正面に持つポーズで）こういう形で見ると、点・点・点と何かがある。そのとき市史を担当していた職員に「どうも何か書いてある、黒い紙を後ろにあててコピーをとれば見えるかもしれない」と話すと、すぐに黒い紙を持ってきてくれた。やってみると、「幸徳」の字が見え、「管野須賀子」の字も見えた。明治43年が大逆事件の年なのは頭に入っていたので、これは大逆事件に関係する手紙かもしれない、とドキッとした。資料整理をしていると、滅多にはないがこのような新資料との嬉しい出会いがある。もちろん針文字書簡は初めてだが……。

杉村楚人冠資料では、ほかにも手賀沼保勝会の趣意書や干拓反対陳情書がそういう資料で、当時は手賀沼が汚い湖沼の日本一を連続して記録しているときだったので、戦前に手賀沼の環境保護があったということに気づかされた。こういうのは資料整理の醍醐味だと思う。ところで、我孫子市史は「市民が作る我孫子市史」を掲げて取り組み、歴史の専門家でない市民の方々が市史資料の研究に取り組み、多くの研究成果を残している。私も大きな刺激を受けた。こういう伝統はこれからの方も受け継いでいってほしいと思う。

では、針文字書簡を詳しく読んでみたい。宛先に「京橋区瀧山町」とあるのは当時の東京朝日新聞社の所在地。校正係をしていた石川啄木^{いしかわたくぼく}が「京橋の瀧山町の新聞社……」と詠んだのがこのことだ。「杉村縦横様」と宛名が本文の最初に書いてあることに注意してほしい。「管野須賀子」の名に続けて「爆弾事件ニテ私外三名近日死刑ノ宣告ヲ受クベシ」、それが本当に正しいのか「御

精探ヲ乞フ」、そして「幸徳ノ為メニ弁護士ノ御世話ヲ請フ」、なぜかといえば「彼ハ何ニモ知ラヌノデス」、彼は無実だからだという。だから、「私外三名」に幸徳は入っていないことになる。

大逆事件の流れを確認してみると、初めは明科事件という、長野県の職工宮下太吉が爆弾の材料を持っていたという事件がきっかけである。「爆発物取締罰則」違反事件として逮捕、取り調べを進めていた。このとき同様に逮捕されたのは新村忠雄、古河力作。加えて火薬を調合する薬研を預かった、借りたという二人も逮捕されているが、この二人は最終的に有期刑になっている。そして、宮下、新村、古河とともに計画を立てたとされたのが、幸徳秋水の内縁の妻であった管野須賀子である。ここまでは「爆弾事件」で、大逆罪の事件にはなっていない。しかし、6月1日に幸徳秋水が神奈川県湯河原で逮捕されるのが「大逆事件」の本当の始まりとなり、和歌山、大阪、高知、熊本、東京など、幸徳と関わりの深い人たちが強引に事件と関係づけられて逮捕されていく。東京で逮捕された坂本清馬さんは、戦後大逆事件の再審請求をした人である。

爆発物取締罰則では、実際に使用をしない限りは死刑にならない。管野が、自分たちが死刑になると6月9日に記しているのは、刑法第73条大逆罪を意識したことによると考えられる。6月から10月まで予審が行われた。予審は弁護士による接見もできず予審判事と被告の二人だけの密室裁判であった。しかも予審で話したことはすべて本審に送られ、担当した予審判事の意見書が強い影響力を持つ。この予審制度は人権上問題があり戦後廃止された。11月に意見書が出され、12月に公判となりやっと弁護士がつく。10日から24日まで連日のように（注：この間に12回）公判が行われ、26名全員に死刑が求刑される。わずかに27日から29日の間、弁護人の弁論が行われ、翌年1月18日には24名に死刑判決、翌日天皇の特赦として12名が無期に減刑、24日に早くも男性11名が、25日には唯一の女性管野須賀子が処刑された。この裁判は、有無を言わず大逆罪を適用して、一気に判決、処刑へと進め、反対者の口を封じるものだった。

針文字書簡の日付、管野が書いた9日は予審が始まったばかりの時期にあたる。管野の予審調書によると、自分たち四人の計画は認めるにしても、幸徳は爆弾計画に批判的で彼を除いて話し合っていたという。これは針文字書簡に書いた内容と一致している。新聞にも詳しく報道できない時期に「私外三名」と書いたこと、幸徳を「何ニモ知ラヌノデス」と書いたことは管野でなければできないことである。そして、わざわざ冒頭に書いた住所と宛先、ここに出してくれと言わんばかりに最初に書いてある。封筒の達筆の宛名はいわゆる「男文字」に見え、管野の筆跡とは異なる。これは、何らかの形で外に持ち出されて、何らかの形で外にいる誰かが封筒を書いたのではないかと推測される。

なぜ、楚人冠のところにこれがきたのか。楚人冠と管野のつながりは和歌山県田辺の『牟婁新報』にある。楚人冠の仏教改革運動の仲間、南方熊楠の神社合祀反対の協力者としても知られる毛利柴庵の新聞である。楚人冠は『牟婁新報』に東京からかなりの数の記事を寄稿していた。

毛利が筆禍事件に遭い入獄したとき、その間を支えたのが管野であった。管野はそこで女性解放運動、公娼設置反対の論陣を張っている。毛利が出獄する際に企画されたお祝いのメッセージを募る記事をめぐり、楚人冠と管野が親しみのある言葉でやりとりをしているのが確認できる。そのころにはもうそういう関係ができていた。そして楚人冠が、社会主義者は「四五を除くのほか」皆嫌いという「四五」の中に幸徳秋水が入っていることはもちろん管野は知っていただろう。安心して、楚人冠なら頼れると考えたことは間違いない。

楚人冠はこの針文字書簡については、公に述べたことはない。針文字書簡は大量の手紙が保管されていたサロンの書棚の下に、禅僧の釈宗演しやくそうえんからの手紙にまぎれさせて入れてあった。外部に明らかにしなかったのは確かだ。ただし、最近個人所蔵の未公開資料からわかったことがある。楚人冠は6月12日に書簡を受けとり、針文字に気づいたのだろう、同僚のなかでもただ一人だけにこの書簡のことを相談した上で、加藤時次郎かとうときじろうのところへ行っていた。加藤は医者で、平民新聞のスポンサー的役割を担った社会主義の理解者である。幸徳らが処刑された年に、低収入の人を対象に実費診療所を開設し、のちには自分の病院を平民病院と改め、平民食堂も設けた、社会的な共済組織を作っていた人物でもある。加藤は、こののち大逆事件の弁護を引き受ける花井はなゐ卓蔵たくぞう、今村力三郎いまむらりきさぶろうとも親しい関係にあった。加藤のところに行けば、弁護士の世話を願ってきた管野に応えることができると楚人冠が考えたとしてもおかしくない。花井は『平民新聞』の筆禍事件で幸徳さかいとしひこや堺利彦の弁護をした弁護士だから、あるいは楚人冠の動きがなくても花井、今村らの弁護団はできたかもしれないが、このとき楚人冠がとった対応は理にかなったものであったと思われる。未公開資料であるため、所蔵者など資料の詳細は控える。

実は、針文字書簡の存在が明らかになったのは、楚人冠のものが二通目である。実は事件の当時、『時事新報』に横山勝太郎よこやまかつたろうという弁護士に宛てた針文字が掲載されている。横山は弁護士なので、「弁護士ノ御世話」という部分の書き方が違うが、同じ内容である。横山は発売禁止になった『自由思想』を発送したという罪で幸徳・管野が逮捕された筆禍事件で弁護を担当していた。針文字はほかにもあったのかもしれない。とはいえ、これはたくさん作れるものではないから、選ばれた人だけが受け取ったのだろう。楚人冠は『時事新報』を見て怒り、横山への公開質問状を掲載した。こんな質問状を出しては、楚人冠自身がどう見られるかという危険もありそうだが、なぜ公開したのか、管野に迷惑がかかると思わなかったか、と質した。横山は本物と思っていない、と返答したが、のちにわかったことは、『時事新報』の記者と夫人同士が親しかったのでうかつにも渡してしまったものだった。結局、横山も偽物とは思っていなかったのである。

『時事新報』の記事を受け『日本』に針文字をどうして持ち出すことができたのか、という記事が載り、着物に縫い付けて他の囚人に渡すなどの方法でそれは可能だと解説された。ほかにも、看守が同情的で協力してくれる可能性もあるだろうし、針文字を持ち出す方法は何かしらあった

ものと考えられる。

大逆事件 100 周年のとき、私たちが見つけた針文字は、黒川創くろかわそうの小説『暗殺者たち』や映画『百年の罅こだま 大逆事件は生きている』で取りあげていただいた。針文字書簡を貸し出して見ていただいたこともある。この針文字から大逆事件の何が見えてくるのか、ということはこれからも考えていきたいと思う。



講演会の様子